

安部公房初期作品研究 ——「抑圧の物語」をめぐって

解 放

安部公房早期作品“被压抑的物語”研究

解 放

論文要旨

安部公房は日本戦後文学研究領域不可忽视的一位作家。因其青少年时期均在伪满洲国度过，故先行研究普遍认为安部的早期作品大都反映了他在伪满洲国的经历。但由于安部的早期作品，特别是发表于二十世纪四十年代的作品皆处于 GHQ の审查监控之下，因此其文章必然受到 GHQ 审查的影响。在 GHQ の诸多审查项目中，关于日本人在伪满洲国受到的待遇等问题属于不可发表或强行修改范畴，因此笔者认为，熟知审查制度的安部公房并不会将自身的伪满洲国时的经历完全反映到作品中。本论文将通过安部一九四八年发表的长篇小说《路标》，阐述安部如何规避 GHQ 审查，并着力论述以 GHQ の审查制度为代表的政治性压抑行为与安部公房早期文学创作的关联性。

目次

はじめに

1. GHQ による検閲と安部公房

2. 『終りし道の標べに』の改訂と GHQ の検閲

3. 安部公房初期文学作品と政治的抑圧

おわりに



はじめに

青少年期を「満洲国」(以下「」省略)で過ごした安部公房が引揚げ者として日本に戻ったのは1946年10月である。現在では、前衛作家というイメージが固定されているが、安部がアヴァンギャルド作家として広く知られたのは、彼の「S・カルマ氏の犯罪」(1951年2月)が芥川賞を受賞した以降のことである。「S・カルマ氏の犯罪」以前にも、人間の身体が植物に変形するシュールレアリスム的な物語「デンドロカカリヤ」(1949年8月)などを出版したが、芥川賞受賞まではほぼ無名であったと言っても過言ではない。本稿は安部公房がまだ無名であった1940年代に刊行された初期作品に焦点を当て、現代の読者には知られていない作品群の特徴を明らかにしたい。

安部公房の1940年代の作品に対する研究は、まず数量からして明らかに少ない。「S・カルマ氏の犯罪」や『砂の女』などと比較すると、40年代の作品に対する研究は、安部公房研究の中でも稀である。その原因は恐らく、この時期の安部の小説作品には哲学的論述が多く含まれるため、物語性が乏しいからだと思われる。しかし、現在の安部公房の作家としての地位を築いたとも言うべき『砂の女』における主題の一つが「権力の抑圧」である。このテーマは既に40年代の諸作品から表象されるようになったと筆者は考えている。つまり、安部の初期作品における政治的抑圧を究明することは彼の中期以降の小説の主題分析にとって非常に意義あることである。

安部公房の40年代の作品を研究する際、看過してはならない外部の政治的抑圧が連合軍総司令部(以下GHQ)による検閲である。最初に刊行された安部公房の小説は『終りし道の標べに』である。新潮社の安部公房全集によれば、この小説が執筆され始めたのは1947年7月15日で、脱稿されたのは1948年2月6日である。そして1948年2月号の雑誌『個性』に掲載され、同年10月10日に真善美社から単行本として出版された。『終りし道の標べに』の執筆から出版までの期間は、実はGHQによる検閲の時期と重なる。

換言すれば、安部公房は、検閲という政治的抑圧を受けている環境下で文学創作を始めたのである。しかし、安部の初期作品とGHQの検閲との関連性を論じた先行研究はほぼない。従って、本稿はGHQによる検閲が実行される期間中に刊行された安部の初期作品を研究対象に、特に『終りし道の標べに』の改訂を巡る諸問題を考察し、先行研究ではあまり触られることがなかったGHQの検閲という政治的抑圧が、安部公房の初期作品に如何に影響を与えてきたかを明らかにしたい。更に、安部公房の初期文学作品とGHQの検閲という政治的抑圧との関連性を論じてみたい。

1、GHQによる検閲と安部公房

GHQによる検閲は事前検閲と事後検閲に分けられる。書籍や雑誌が刊行される以前に、原稿を検閲当局に提出するのが事前検閲である。事後検閲とは、書籍や雑誌が刊行された後で検閲当局に出版物を納本する検閲制度である。『GHQ日本占領史 第17巻 出版の自由』によれば、出版物の検閲は1945年9月3日から開始し、雑誌の事前検閲は1945年9月19日から開始し、1947年10月10日に事後検閲に移行した。書籍の事前検閲は1945年10月21日に始まり、1947年10月15日まで維持され、その後、事後検閲に移った¹。江藤淳の『閉ざされた言語空間』によれば、事前検閲は1945年10月8日から開始し、雑誌は1947年12月15日、書籍は同年の10月15日を境目に事前検閲から事後検閲に移行したのである²。山本武利の『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』によれば、雑誌の事後検閲は1947年10月から始まり、書籍の事後検閲は1947年11月から始まったのである³。以上の資料から、書籍と雑誌における事前検閲から事後検閲へ移行した時間がそれぞれ異なっていることが分かる。こうした異なる結果は、恐らく、民間検閲支隊が1949年10月31日に廃止されることで、検閲終了と同時に、検閲関係の資料が廃棄処分となったためと思われる。江藤は「実際に検討してみると、占領期の検閲を扱った文献は、きわめて寥々としていた」と、GHQの検閲に

対する研究の困難さを述べている⁴。しかし、十重田裕一が述べているように、書籍よりも刊行部数が遥かに多い雑誌の方が、事前検閲に大きな負担がかかるため、事後検閲への移行が早かったはずである⁵。従って、筆者は山本武利の考察結果が最も妥当であると考ええる。

注目に値することは、事前検閲と事後検閲では検閲を通過する確率が異なる点である。事後検閲の場合、GHQの検閲リストに入っている極右と極左の出版社を除けば、ほぼ処分を受けた書籍はなかったのである。つまり、事後検閲において、雑誌や書籍は、予め検閲の体制に順応した方針のもとで出版されている⁶。しかし、そうした結果は決して事後検閲が事前検閲より、検閲される側への政治的抑圧が弱くなったことを意味するのではない。むしろ、事後検閲は事前検閲よりその抑圧が強くなったと言える。十重田裕一は「検閲は書き手や編集者という個人レベル、あるいは出版社・新聞社などの組織レベルに浸透し、内面化されたときにより効率を発揮する。事後検閲においてより多くあったであろう自己検閲は、事前検閲の場合と同じように、あるいはそれ以上に、占領期の検閲を考えるうえで必要な問題を提起している。』と、事後検閲における自己検閲が如何に機能してきたかを述べている。十重田が述べているように、事後検閲の通過率が96%を超えるのは、まさに事前検閲を通して作者の内面で共有されるようになった自己検閲が機能しているからである。安部公房もGHQの検閲を強く意識し、自己検閲が機能している作者の一人と思われる。今まで、安部公房の作品とGHQの検閲との関係を論じた先行研究はほぼなく、「デンドロカカリヤ」における登場人物の言説とGHQの検閲制度との関連性を考察した森村優太の論が重要である。森村は論文の中で、以下のような結論を述べている。

《園長》は《コモン君》をしつこく追い回し、全てを知っているかのようにふるまう場面がある。《デンドロカカリヤ》のためだといって、自分の考えを押し通そうとする。その方法は決して

人目につくような大胆な行動ではなく、そっと忍びよって気がつけば支配をするようなものであった。このような点から、《園長》という人間は[……]おそらくGHQ側の人間であり、またその支配下にある検閲する側の存在になぞらえることができるのではないだろうか。《コモン君》が迎える最後の場面においても、圧倒的な強さを見せている様子から、《デンドロカカリヤ》を管理するという部分にも検閲を連想させるのに十分なイメージがあると考えられないだろうか⁸。

森村は、「園長」が植物の「デンドロカカリヤ」と化した「コモン君」を支配しようとしていることによって、「園長」をGHQの検閲する側の人間として論じている。テキストの読みの可能性の一つとして問題ないが、「園長」の仕事が植物を監視もしくは管理することであるため、「園長」はただ自分の責任を果たそうと行動を取った、と別の読みの可能性も否定できない。森村の考察は、「デンドロカカリヤ」における人間の植物への変形過程を、GHQという政治的抑圧と照応しながら論じるところに意義が見られる。しかし、虚構の作中人物が構築した権力構造と、検閲する側と検閲される側から成る現実世界の権力構造と比較することには問題が生じる。

「デンドロカカリヤ」が脱稿されたのは1949年4月20日、同年の8月に雑誌『表現』で掲載された。つまり、GHQの検閲が事後検閲に移行してから出版された作品である。しかし、事後検閲期間中に執筆された「デンドロカカリヤ」の作中人物からGHQの検閲者との関係性を引き出すという森村の解釈が妥当であれば、「デンドロカカリヤ」は恐らく、「検閲制度への言及」という検閲方針に抵触する理由によって、文章を削除されたかもしれない。江藤淳の調査によれば、検閲に携わる要員は日本人、外国人を合わせて1万人以上を超え、特に日本人検閲員はのちに「革新自治体の編集長、大会社の役員、国際弁護士、著名なジャーナリスト、学術雑誌の編集長、大学教授等々⁹」になったことを考えると、高度な知識を持った大規模な検閲

員が、「デンドロカカリヤ」における検閲制度への言及を見過ごすことはありえない。安部の自筆年譜によれば、「デンドロカカリヤ」が刊行される前後、安部は「夜の会」、「世紀の会」と言った政治集会に参加するようになったのである。「夜の会」や「世紀の会」の性質が左翼的であったことは注目に値する¹⁰。従って、この時の安部が左翼政治活動と関わっているため、彼がGHQの検閲員の注意を引いた可能性は充分考えられる¹¹。それにもかかわらず、「デンドロカカリヤ」が削除されることなく、雑誌に掲載されたことは、「デンドロカカリヤ」のテキストがGHQの検閲を間接的に表象していないと、検閲員が判断したことを傍証していると言える。つまり、「デンドロカカリヤ」においては、作中人物における支配と被支配の構造と、現実世界における検閲側と検閲される側の権力構造と比較してはならない。前文で述べたように、二年間にわたる事前検閲を経て、GHQの検閲方針に抵触しないように創作もしくは出版することが、事後検閲期間中においては一般的になったのである。従って、事後検閲で共有された認識の中で、安部が「デンドロカカリヤ」において、検閲への言及を連想させる書き方をする可能性は低いと思われる。

筆者の調べによれば、安部公房が初めてGHQの検閲とかかわりを持ったのが、親友であり哲学者でもある中埜肇に送った書簡が、民間検閲支隊の郵便検閲を受けた時においてである。新潮社の安部公房全集に収録されている「中埜肇宛書簡第9信」(1947年6月17日)と「中埜肇宛書簡第10信」(1947年7月5日)では、それぞれGHQの検閲印:C.C.D.J-4065、C.C.D.J-2289が押されている。中埜肇が安部公房に出した書簡を読むことができないため、果たして中埜肇が返信の中で書簡が検閲されたことを告げたかどうかを知ることはできない。恐らく、江藤淳が「在日米軍当局は、批判に対してきわめて敏感である。日本人が私信を書いて投函するときには、検閲の悪口を書かぬように細心の注意を払わねばならない。」¹²と述べている通り、中埜肇は検閲されたことを書簡で安部公房にストレートに告げたとは考えにくい。しかし、二人と

も哲学に熱心であることを考慮すれば、中埜肇が代替的表現を使って検閲に言及した可能性はある。安部公房も恐らく中埜肇の言葉の変化に気づいたと思われる。最初に検閲された「中埜肇宛書簡第9信」から半月後の「中埜肇宛書簡第10信」の冒頭で、安部は次のように書いている。

手紙ありがたう。待つてゐる丈に非常にうれしかった。元気らしいのは何よりだが、何故だろう、あれは僕の考へ異ひだらうか、……あの、何處とはなしに言い過ぎた様な書きっぷりは¹³。

安部公房は書簡で中埜肇が「何處とはなしに言い過ぎた様な書きっぷり」をしていると、書いている。手紙の冒頭部分としては非常に唐突としか言いようがなく、また前後の文脈を見ても、一体この一言は何を内容として語っているかも推測できない。更に、手紙の後半部分では、「全く、しかし、それこそ問題の地点、総てを語つた様で、しかし一言も未だ語つてゐない点だ。是非くはしく話してほしい。」¹⁴と書き、中埜肇の曖昧な説明に対して、安部公房は「総てを語つた様で、しかし一言も未だ語つてゐない」と受け止めている。中埜肇が物事を曖昧に語るのとは、安部が送り出した書簡が検閲されたことを安部に気づかせようとしたからだと思われる。そして、安部が中埜肇の曖昧な提示によって、検閲されていることに気づいたことは、二人の書簡から傍証できる。

中埜肇宛ての書簡は戦中において7通あって、そのほとんどが安部公房の内面の孤独、哲学思想、詩についてであった¹⁵。しかし、戦後初めての書簡「中埜肇宛書簡第8信」(1946年12月23日)において、安部公房は今まで言及していなかった自己の生活様態を語り始めるようになった。

第一に財政的困窮です。父を失ふと同時に全財産を失つて、僕は今、先づその日の糧から心配していかなければならぬ立場です。若し高谷が居て呉れなかつたら、僕は東京に出て一週間と暮らす

事は出来なかつたでせう。[…] 一時は原稿で収入を得る事も考へましたが、それは殆ど不可能に近い事です。[…] とても定収を得る等と言ふ見込みはつきません¹⁶。

安部公房が書簡で述べている自分の生活状態は、引用が示す通り、収入がないまま、食べ物もない経済的に困難な状態であった。続いて初めて検閲された書簡「中埜肇宛書簡第9信」においても、似たような記述がある。

さて、僕の結婚ですが、驚かれたでせうね。[…]
問題は結婚した後の生活、又は生活態度に在ると思ふのです。与えられた環境と言ふものは、それが如何なるものであつてもすべて同等な課題であると思ふのです。[…] 僕達は互ひにひどく貧乏です。一緒に色々の内職をしてやつと日々を生きてゐますけれど、若さが僕等の支柱となつて呉れます¹⁷。

安部公房はこの書簡の中で、自分が結婚したことを中埜肇に告げているが、問題は安部自身が語っているように「問題は結婚した後の生活」である。引用の「僕達は互ひにひどく貧乏です」と「一緒に色々の内職をしてやつと日々を生きてゐます」が示しているように、この書簡もやはり、第8信の延長線上に置かれていることが分かる。また、「与えられた環境」が「すべて同等な課題である」ということは、恐らく、戦後日本における全体的貧困を示唆しているだろう。しかし、「中埜肇宛書簡第10信」では、「今¥4000.00ばかり借金して蒼くなつている。が、今紙シバイの原稿を引受けてゐるのが、一寸物になりそうだ¹⁸と述べている。経済的緩和を表した言葉は後程の書簡——いずれも検閲の期間中の書簡、に多く見られる。例えば、「中埜肇宛書簡第11信」（1947年10月22日）では、「又仕事は眞知子がポスターや雑誌のカット等を引受けるのと、僕のそろそろ入つて来そうな原稿料とで、まあ何とか食つて行けさうです。」¹⁹と明らかに経済が緩和し

た状況を強調している。第9信以降の書簡を確認すれば、安部公房は自己の経済状況を第8信と第9信のように赤裸々に語ったことはなかった。しかし、実際の経済状況は、それほど緩和したとは言い難い。1968年4月20日に、事後検閲の期間中に各雑誌に掲載された安部の短編集を収録した単行本『夢の逃亡』が徳間書店で刊行された。「後記」の中で、安部公房は次のように書いている。

当時の私は、濃霧の中をさまよっているような状態だった。今でも、べつに霧がはれたと思つてゐるわけではないが、あの時代の霧はまた別格だった。書くことによって、私はその霧を切り抜け、しかし書かれた結果については、どうでもよかったのかもしれない。あれは戦後だった。そして、私の青春の最後の数年間だった。当時、私には長い間、住む家がなく、またお金がなく、したがって餓え疲れていた。明日の糧どころか、今日の糧を得るさえ困難なことがしばしばだった。そのくせ作品には、貧困や餓えのことはあまり出てこない。たぶん、そうした状況を、なにも特別なことではなく、恒常のものとして受止めていたせいだろう。だが、この作品集の背景にあるものは、まさに飢えた青春そのものなのである。私は、森の木陰で、増悪の牙をむき出している、飢えた狼のような自分自身の姿を、ありありと思い出す²⁰。

（下線引用者、以下同じ）

引用は、日本に戻ってから作家として無名であった安部の生活状態を記している。下線に示されている「貧困」に関する回想は、前文で引用した「中埜肇宛書簡第8信」における「父を失ふと同時に全財産を失つて、僕は今、先づその日の糧から心配していかなければならぬ立場です」と呼応している。徳間書店で刊行された『夢の逃亡』は主に1948年の初めから1949年の終わりの間に出版された安部公房の短編小説を収録している。この時間は、中埜肇との間で交わされた書簡の時間と重なるのである。この期間中に継続している

深刻な「貧困や餓え」の状態は、第10信や第11信で述べられているような緩和した経済状態と矛盾する。従って、検閲された第9信以降の書簡において経済的緩和を強調している安部公房は、飢餓の誇張が検閲の対象となるGHQの検閲方針を意識していると言っても過言ではない。つまり、中絶筆の曖昧な表現の提示によって、安部公房は経済上の緩和を意図的に書簡で語るようになり、こうした行為は安部がGHQの検閲に順応し、自己検閲が徹底していることを示唆している。

安部公房の自己検閲が機能していることは、GHQの検閲が49年10月31日に廃止されるまで、その検閲制度に全く言及していないことから傍証できる。無言の安部と対照に、検閲に猛烈に言及している代表作家として、山田風太郎と永井荷風の名が挙げられる。山田風太郎は日記の中で「残される金九十五銭。水谷氏の手紙二日に向うを出したものなるが進駐軍の検閲ありしたため余が許へ十日へ来れるものなれば返事余り遅くなれば悪し。(1947年6月17日)」¹⁾と憤慨を示している。永井荷風も日記の中で「数日前のことなるべし、大坂にて警吏朝鮮人の闇売をなすもの多数を捕へしに、同国人之を取返さんとして警察署を襲ふ[……]この騒に米国憲兵の一隊事情に通ぜざれば機関銃を放ち乱闘する日鮮人及び警吏を追払ひたり、死傷者少からざりしと云、此事件米人検閲の為新聞紙には記載せられず、米人口には民政の自由を説くといへれどもおのれに利なきことは之を隠蔽せんとす、笑ふべきなり(1946年4月6日)」²⁾と述べ、GHQの検閲に対する不満と揶揄を表している。二人の日記は検閲当時では当然刊行されていないが、検閲に対する作家としての態度を後から窺うことができる。山田風太郎や永井荷風とは異なり、安部の同時期の文章にはGHQへの言及がなかった。こうした差異は検閲された同時代の作者と比べることによって更に明らかになる。

谷崎潤一郎の『細雪』は戦中において、日本内務省の検閲によって発行禁止にされたことは周知の通りである。戦後においても、谷崎の作品が検閲されたことは注目に値する。アンヌ・バヤール＝坂井は谷崎の短

編小説「A婦人の手紙」が検閲された理由について、「このあらゆるジャンルを超越しているかのように思われる作品を前にした検閲官は作者の意図を掴めず混乱したらしく、その意図のかわりにテキストが読者に及ぼし得る影響を問題にしている。そしてそこに戦闘機という戦争の象徴のようなものが登場する以上、これは敗戦国の国民の戦闘意欲を煽る危険性があると判断するのである」³⁾と述べている。つまり、谷崎の小説が検閲されたのは、検閲官が30の項目⁴⁾に及ぶ検閲方針のうちの、「戦争擁護の宣伝」、「軍国主義の宣伝」と「暴力と不穏の行動の煽動」に関わりを持つと考えた結果に他ならない。

谷崎と同じ項目で検閲されたのは川端康成である。十重田裕一は川端の小説「過去」と「生命の樹」がGHQから修正を要求された原因について、「『過去』『生命の樹』は、題材やテーマは異なるが、戦中の過去を回想する形式をとっている点で共通性が見られる。また、この二つの小説は、戦前・戦中から断絶した現在を描くのではなく、過去から現在に至る連続性のもとに創作されている点も通底している。その際、当然書かれるであろう、占領期日本の進駐軍と戦中の特攻隊や沖縄戦に関する言及や表現に対してGHQ/SCAPから修正要求がなされているのである。」⁵⁾と述べている。十重田が述べているように、川端は、占領と戦争を描いている点で谷崎と同じく処分されたのである。しかし、川端の「舞姫」をめぐる修正について、十重田は、「『舞姫』の第二九回の連載分に見られる官能的な描写が猥褻な表現にあたり、朝日新聞に掲載するには難しいという判断が編集局次長によって下されたという。[……]その論拠を確認したところ、「マッカーサーの声明」が出ようとする時期に重なるというのが、不掲載の理由であった。[……]川端は内容を大幅に変えることなく、指摘を受けた表現の一部を抽象化しながら改稿しているように見える。」⁶⁾と語っている。「舞姫」における露骨な風俗描写は、GHQの検閲方針における「日本人女性との性交渉」とは程遠いものであるにも関わらず、新聞社は「舞姫」の修正を川端に求めている。これについて、十重田は「『舞姫』の削除された

所は、民主化ならびに人間性の解放を肯定的、積極的に押し進めていた GHQ/SCAP によるメディア規制の対象になるものとは考えにくい。GHQ/SCAP が官能的な描写については厳しく規制することがあまりなかったことから、ここで意識されているのは、別の言論統制であったように思われる。[…]戦前・戦中の内務省による検閲の記憶がまだ生々しい時期であることを考えると、刑法一七五条に「風俗壊乱」による規制を重ねて見ていたことも想起されてくる。」²⁷と述べている。つまり、「舞姫」を検閲したのは、GHQ の直接検閲ではなく、戦中の内務省の検閲と戦後の GHQ による事前検閲から生まれた出版業界の自己検閲である。

GHQ の検閲方針における「占領軍兵士と日本人女性との交渉」に抵触して検閲された例として、久生十蘭の名が挙げられる。川崎賢子は久生の小説「花合せ」が検閲処分を受けた理由について、「『花合せ』とは戦後占領期の混乱した世相の中である種、典雅などいえる表題だが、要は「花」の「交配」それも、欧米の種と日本の在来種との「異種交配」のエピソードを表して、異文化受容、国際的な文化摂取という主題を暗喩するという結構になっている[…]フランス人権宣言以来の近代的倫理についてのごくまっとうな考察が、削除されている。」²⁸と語っている。谷崎潤一郎における検閲処分の理由とは異なり、久生十蘭が検閲を受けたのは、川崎が述べているように、欧米と日本の花との「交配」が象徴する欧米人と日本人との混血現象が、「占領軍兵士と日本女性との交渉」という検閲方針に抵触しているからだと考えられる。

以上の検閲された事例と比較して、検閲期間中に掲載された安部公房の作品を見ると、戦争や占領軍への言及や、過剰な男女関係を描いたものは極めて少ない。しかし、安部の初期作品における過去の満洲国での経験の表象は、GHQ の検閲処分を最も受けやすいと思われる。それは、安部の満洲国での実体験がテキストで表象される際、特に「戦争擁護の宣伝」、「軍国主義の宣伝」などの検閲方針に抵触する可能性を孕んでいるからだ。実際、満洲国に言及したことによって検閲された代表的な文章を見れば、「宣伝」に抵触してい

ることが分かる。

満洲事變は張学良の日本放逐政策に對した、對抗的自衛的のものだから、我等もこれを必ずしも否とせぬ。何となれば中華民國の領土といふものの、元來獨立の地で、二十王朝中眞に領土だつた時、僅々の年代に過ぎぬ。若し獨立して民衆の幸福な土地になれば、日本は産婆役として、早く外交から手を引くがよいのに、悶々として今日に□つたのだが、その事で國際聯盟を脱退したが、匪賊横行の地が、五族協和安業の地と化したことは、事實誰も否定できない²⁹。(原稿では、□は読み取れない。文脈からして、「至」と思われる。)

上記の引用は、GHQ の検閲期間中に刊行された雑誌『信人』に掲載された文章である。引用の部分は、「propaganda」＝「宣伝」という理由で GHQ の事前検閲によって削除されたものである。検閲文書では「propaganda」しか書いていないが、ここで示されている「propaganda」＝「宣伝」は恐らく「戦争擁護の宣伝」と「軍国主義の宣伝」を指しているだろう。事前検閲だけではなく、満洲国を描写することで、「宣伝」などの検閲項目に抵触して検閲されたことは事後検閲の段階においても見られる。

王精衛氏がかつて満洲を視察した時に、新京を見て歸つて來て非常に憤□して、日本人は満洲を助けるといつて満洲を占據してしまつたぢやないかといつたところが、王精衛の下におつた者が、それは非常な間違ひである。日本があれだけの資本をもつて來てどんどんやつたからこそ満洲はあんなに立派なものになつたのだ、満洲が立派になつたから満洲の人々は非常に幸福になつたのだ、ということをつた³⁰。(原稿では、□は読み取れない。文脈からして、「慨」と思われる。)

引用した文章は、GHQ の検閲によって削除された雑誌『講演』の一部分である。文章の刊行時間に示さ

れるように、満洲国に関する内容が削除されたのは、雑誌の検閲が事後検閲に移行してからの時である。検閲を受けた理由は、詳しく書いていないが、前後の文脈から推測すると、恐らく「戦争擁護の宣伝」や「軍国主義の宣伝」が考えられる。

以上の二つの引用を通して、満洲国を扱う文章が事前検閲においても、事後検閲においても、「戦争擁護の宣伝」や「軍国主義の宣伝」といった「宣伝」という検閲方針に抵触する可能性が高いことが明らかになった。しかし、GHQの検閲期間中に刊行された安部公房の作品では、満洲国での実体験が表象されたにも関わらず、こうした作品が検閲されることがなかったのは注目に値する。次節では、GHQの検閲期間中に刊行された『終りし道の標べに』を対象に、安部公房の満洲経験がテキストで表象される際、彼の自己検閲が如何に機能して、検閲方針への抵触を避けてきたかを明らかにしたい。

2、『終りし道の標べに』の改訂とGHQの検閲

『終りし道の標べに』、この小説が執筆され始めたのは1947年7月15日で、脱稿されたのは1948年2月6日である。そして48年2月号の雑誌『個性』に掲載され、同年10月10日に真善美社から単行本として出版された。本作はGHQの事前検閲と事後検閲が実施される中で執筆され、単行本として刊行されたのである。『終りし道の標べに』を論じた先行研究の中で、GHQの検閲と関連するのは、『終りし道の標べに』における改訂に対する考察である³¹。『終りし道の標べに』は48年10月10日に真善美社から刊行されたが、1965年12月10日に冬樹社から大幅な改訂が施されて出版された。冬樹社版の「あとがき」の一部を以下に引用する。

私の処女作である。この作品を書きはじめてから、ちょうど二十年になった。初版は、昭和二十三年の秋だったが、ながいあいだ手もとに本

がなく、内容についても、ほとんど忘れかけていた。[……] 戦争中のあの閉鎖的な空気のなかで、リルケとニーチェの間を往き来しながら、実存主義だけをたよりに自分を支えてきた私には小説的虚構も、世界を表現するための手段以上には、なんの意味も持ちえなかった。[……] やはり、この作品を、私の出発点として認めざるをえないという気持ちになった。[……] この作品が、いまなお私の仕事をつらぬいて通っている、重要な一本の糸のはじまりであることを、否定することは出来ない。さすがに表現のまどろっこしさは争えず、多少手を加えはしたが、あくまでも原意をより明確にする範囲内にとどめることにした。二十年間行方をくらましていた、私の最初の分身を、いまは心よく迎え入れてやりたいと思う³²。

引用に示されているように、安部公房は『終りし道の標べに』を自分の処女作としていることがわかる。しかしなぜ、17年後に、「内容についても、ほとんど忘れかけていた」『終りし道の標べに』を改めて改訂しなければならないのだろうか。安部公房の言葉によれば、改訂は「あくまでも原意をより明確にする範囲内にとどめることにした」が、実際、文章の改訂は大幅に施されたのである。『終りし道の標べに』における改訂問題について、最初に論じたのは山田博光である。氏は「根本的な変更の一つを指摘すると、放浪者が「故郷からの逃亡者」となっていることである。旧版で、存在の故郷を求めての放浪の旅立ちであつたものが、新版では、徴兵制などによつて自分を奪おうとする国家、自分を現実にしぼりつけようとする恋人から、意識的に逃亡したものとして主人公を描いている。[……] 全体として、現在の問題意識に基づいて、旧版を整理し、書き改めたという感が深い。」³³と指摘している。山田は、旧版の『終りし道の標べに』に対して、新版の『終りし道の標べに』は1965年の社会問題を反映した新しい作品である、と述べている。

西田智美の研究は両版の違いを初めて詳細に考察したものである。西田は、表現や内容の改訂、登場人物

の設定関係など、両版における差異を細かく羅列した上で、「安部が旧版『終りし道の標べに』で求めている「故郷」とは、〈自らの手で新しく創造すべき一つの世界〉であったのではないだろうか。[…]前者が〈新しい世界〉を創造するための出発として描かれているのに対して、後者では、新たに創造した世界をも壊すことを前提とした出発として描かれている。これらは旧版と新版の執筆目的の根本的な相違を示すものである。」³⁴と論じている。西田は、両版のつながりは「世界」を共に意識しているところにあるが、旧版が「世界」の創造に対して、新版は「世界」を破壊しようとするところに差異がみられると論じている。西田が論じている「世界」というのは、山田が言及した「故郷」の概念を敷衍したものと考えてよいだろう。即ち、二人とも『終りし道の標べに』のテキストにおける「故郷」の表象に主眼を置いたのである。

竹田志保は上記の二人とは異なる。竹田は、安部公房が真善美社版の『終りし道の標べに』を書いたときに「アヴァンギャルド」芸術に初めて目覚め、冬樹社版の『終りし道の標べに』が刊行された時においては「アヴァンギャルド」芸術を充分理解したという前提を踏まえ、「真善美社版には、「存在そのもの」を求めながら得られない、円滑状に重層した「迷い」の過程、冬樹社版は、不毛な自己占有という終点に向かって一方通行に進む「否定」の過程を見ることが出来るだろう。[…] 安部公房の二つの『終りし道の標べに』の間には、「政治的アヴァンギャルド」と「芸術的アヴァンギャルド」の問題があった。しかし、現実の「革命運動」のなかで安部は「政治的アヴァンギャルド」としては挫折していった。そのような地点から過去を振り返った時、安部にとって過去の「可能性」は、「否定」すべきものでしかなかったのではないだろうか。」³⁵と述べている。竹田の論文は、作者が置かれている政治環境を取り入れながらテキストの改訂を論じているところに意義が見られる。竹田の考察を踏まえた上で、本稿はテキストの改訂と安部公房が直面しているGHQの検閲という政治的抑圧との関連性を考察したい。

山田は両版の差異をごく簡潔に述べているが、徴兵制が象徴する国家権力から逃亡するという新版の新しいテーマへの指摘は鋭い。西田は山田の指摘を敷衍して、「新版では徴兵を強要する国家から逃げるため、となっている。これに伴い新版では「戦争」についての記述が随所に盛り込まれているが、旧版においては戦争の表記はない。」³⁶と述べている。しかし、安部公房がなぜ、旧版において「徴兵制」や「戦争」に言及しなかったかを、山田も西田もともに看過している。筆者は、安部公房が真善美社版の『終りし道の標べに』において、「徴兵制」や「戦争」に言及しなかったのは、GHQの検閲への配慮が原因だと考えている。まず、「戦争」に対する異なる描写を以下に引用する。(上旧版、下新版、以下同じ)

山海関以北では屈指の軍閥だった。いくつもの糧棧（大地主）を支配下に置いて、巧みな戦略でどんどん勢力を増していたものさ。そして或時中央正規軍から正式の編入申込があったのだが、それを見事に拒絶したばかりじゃなくて、俺は第二のじんぎすかんだという名乗りでいきなり近くの正規軍を全滅させてしまったのさ。あれが奴の絶頂だったね。東三省の四半分を領地にして、ほんとうに天下を征服しそうな意気込みだったよ³⁷。

山海関以北では、五本の指に数えられる軍閥でね、いくつもの糧棧を支配下に置いて、そりゃあ大した羽振りだったよ。ある時なんぞ、中央正規軍から正式の編入申し込みがあったのを、見事に蹴ったばかりか、逆に近くの正規軍に攻撃をかけて、全滅させてしまったというほどの勇猛ぶりだね。あれがやつの絶頂だったな。中央正規軍を撃破したっていうんで、そろそろ蠢動しはじめていた関東軍から、何やらメダルみたいなものと、將軍の称号をおくられると、もう本当の將軍になったみたいに、ふんぞり返っちまってね。まったく明日にも天下を征服しそうな意気込みだったよ³⁸。

引用の下線が示している通り、新版と旧版における最も異なる点は、新版では「関東軍」が書かれていることに対して、旧版では書かれていないことである。旧版において、中央正規軍（＝中国側の軍隊）と対戦しているのは、山海関の北に位置する東三省を拠点とする軍閥（＝中国人匪賊）である。従って、旧版で描かれている「戦争」とは、日本とは関係を持たない中国内部における官と賊の間で行われた小規模の争いにしか過ぎない。しかし、新版では「関東軍」の出現によって、二つの結果をもたらすことになる。一つは、満洲国という舞台が明確化されたことである。旧版では、地理的空間を示す表現は、「山海関」や「東三省」といった読者には馴染まないものであり、こうした場所は、中国の地理知識を持たない一般の読者に、曖昧な非日本的な空間のイメージを喚起させる。実際、安部公房は、旧版のテキストにおいて、満洲国を指し示す言葉を巧みに運用することによって、満洲国への連想を抑えようとしていたと思われる。例えば、旧版では、以下のような描写がある。

その時私は錦県の房と言う小資本家の所で、サイダーの製造技師をしていたのだが、夏も過ぎ仕事が無くなったので、幾らかのまとまった金ももらい、今度は審陽の遠い親戚にあたる、やはり房という焼酒工場を持っている男の処へ、新しい蒸溜法や洋酒の合成法を教えに、房の使用人三年に案内されて出発した所だった。[...] それは私達の身の安全の為もあったが、抜目のない房の配慮で、審陽迄の馬車の往復を無駄にせぬ為、少量の金塊を積込んであるのを守る為だった³⁹。

上記の引用の中では、「審陽」が二度出たが、全集の解説によれば、「審陽」は「瀋陽」の誤用である。しかし、安部公房が二回も文字を誤用することはあり得るのだろうか。恐らく、安部は意図的に「瀋陽」ではなく、「審陽」を使っていると思われる。その理由は、満洲国という明確な名前を喚起させないためであり、その根本的な理由は、GHQの「満州における日本人

取扱いについての批判」という検閲方針に抵触したくないからだと考えられる。「瀋陽」の書き方を故意に変えて使っているのは、同時代の作品「友を持つということが」からも窺える。この作品は1948年11月に書かれ、GHQの事後検閲の期間中にあたる。テキストの中では、以下のような描写がある。

其処はシェンヤンの旧市街と新市街を結ぶいちばん古い道で、丁度旧市街の終わるあたり、ひび割れてはいるがアスファルトで固められ、小さなロータリーがあって、三経路と緑色の字で書かれたガス燈まがいの街燈がほんとうに青い光を放っている⁴⁰。

下線の「シェンヤン」は注目に値する。「シェンヤン」とは、実は「瀋陽」の中国語および英語の発音である。「瀋陽」の日本語音読「シンヨウ」は日本人読者が熟知しているかもしれないが、テキストでは敢えて、漢字も書かずに、「シンヨウ」とも書かずに、最も知られていない呼び方を使っている。こうした表現は安部公房が検閲方針を意識している裏付けと言えよう。また、新版のテキストにおいて、「満洲国」という言葉がそのまま使われたことに対して、旧版では全く使われていなかったことも看過できない。その差異を以下に羅列する。

俺は野心があったんだ。ただ野心があったんだ。野郎共にはそれが分からんのさ。[...] 俺の夢はもっと大きいんだ。だいたいこんな部落が俺にとって何んだというんだ。ごみ箱じゃないか。俺はな、畜生、野心があるんだ。それに文句をつける奴は端から殺ってしまうだけさ⁴¹。

そりゃ、ちがう。最後に俺の首をしめたのも、やはり俺自身の夢だったのさ。高なんかに、なんの関係あるものか。俺は夢を持ちすぎたんだ。この国は、満洲国だなんていう、いやな看板をかかげていたが、そんなものは昼間だけの看板で、陽

が沈んだとたんに、国なんか無くなってしまうのが実情だったからな。[…] 国民党の正規軍を名乗っていた、夜の部隊を、ぶったたいてやったんだ。[…] 関東軍は、俺に、満州国軍入りを正式に勧誘してきた⁴²。

旧版と同じ箇所を比較すれば、新版では「満州国」という明確な固有名詞を使っていることが分かる。旧版において「満州国」の表象を極力抑えようとしているのに対して、新版では「満州国」という名詞を明確に打ち出すことによって、テキストにおける満洲国の表象を配慮なく呈示している。こうした作者の意図的行為は、GHQの検閲項目を意識している証拠と言える。

新版における「関東軍」や「満州国」と言った特定の固有名詞の出現によってもたらされたもう一つの結果は、中国内部における小規模な争いが、国家間の大規模な正式な戦争となってしまったことである。この戦争への言及という改訂について、いずれの先行研究もその原因を論じることはなかった。筆者は、新版の出版時間においては、「戦争擁護の宣伝」、「軍国主義の宣伝」や「暴力と不穏の行動の煽動」と言ったGHQの検閲が廃止されることによって、戦争への直接的言及が可能となったからだ、と考えている。既に引用したが、旧版の『終りし道の標べに』では陳という作中人物は、「山海関以北では屈指の軍閥」である。そして、国民党の「中央正規軍から正式の編入申込」が来たが、陳はその申し込みを断って、正規軍を全滅させることによって、東三省の一部を自分の支配下にしたのである。つまり、陳は中国東北部地方の局部で国民党の軍隊と小規模な争いを通して、中国東北部の一部で生活しようとする「野心」を持つ匪賊にしか過ぎない人物である。従って、旧版のテキストは、中国内部の争いを描いているため、検閲側のGHQもこうした中国内部の争いは、日本が関わった戦争と関連性を持たないことによって、検閲方針に抵触していないと判断したのではないと思われる。しかし、新版においては、陳が国民党の正規軍を全滅させたことに対

して、「関東軍」が関与するようになり、陳は「関東軍」から「將軍の称号」を得て、自分の土地を支配している後に、「関東軍」から「満州国軍入りを正式に勧誘」されるようになったのである。新版のテキストのこうした改訂は、「関東軍」が象徴する戦時の日本と、国民党の正規軍が象徴する戦中の中国が対立している戦争の時空間を前景化する同時に、日本と中国の両方と関係を持つ「満州国」という地理空間を浮彫りにしたのである。従って、旧版ではこうした描写が見られなかったことは、明らかに安部公房が「戦争擁護の宣伝」、「軍国主義の宣伝」といった検閲方針を意識している結果に他ならない。

『終りし道の標べに』の改訂には、安部公房におけるGHQの検閲へ配慮が通底していると言っても過言ではない。1965年の冬樹社版『終りし道の標べに』の改訂の理由の一つは、GHQによる検閲が施された期間中に刊行された真善美社版の『終りし道の標べに』において、過去の満洲経験をテキストで表象することができなかった点にあると思われる。無論、GHQの検閲による政治的抑圧が1965年では完全に解消されたからこそ、こうした植民地での実体験の表象がテキストの改訂によって可能となったのは言うまでもない。つまり、『終りし道の標べに』の改訂プロセスは、GHQの検閲という政治的抑圧によって戦中の記憶や満洲での実体験を語ることを禁じられた時期から、語ることを許される時期への変化を意味していると言える。

3、安部公房初期文学作品と政治的抑圧

以上の論述を通して、処女作『終りし道の標べに』において、安部公房はGHQの検閲方針に抵触しないように創作してきたことが明らかになった。しかし、旧版の『終りし道の標べに』だけではなく、この時期に書かれた小説作品には、新版の『終りし道の標べに』ほど明確ではないが、満洲国の都市の名前や、戦争が微かに描かれていることも看過できない⁴³。こうした戦争や満洲国を連想させる安部公房の書き方は、彼の

初期文学作品が検閲という政治的抑圧と緊密に係わっていることを示唆していると思われる。本節では、安部公房の初期文学作品と政治的抑圧との関連性を明らかにしたい。

『夢の逃亡』の「後記」では、安部公房は「当時の私は、濃霧の中をさまよっているような状態だった。[…] 書くことによって、私はその霧を切り抜け、しかし書かれた結果については、どうでもよかったのかもしれない。」と語っている。前文で既に論じたが、『夢の逃亡』に収録されている作品は全て GHQ の検閲期間中に刊行されたものであるため、『夢の逃亡』の「後記」で語られている「当時」の「濃霧」は、恐らく GHQ の検閲を示唆している可能性が高い。そして、安部がこうした「霧」= GHQ の検閲という政治的抑圧に対抗する行為は正しく「書くこと」= 創作することである。GHQ の検閲期間中に刊行された作品では、「書くこと」= 創作することが繰り返し強調されている。例えば、以下の引用が典型的である。

書くということは何ということなのか、また何のために書かなければならないのか、そういった不安でもそれだけで充分理由になると思うのだ。書きながら一字々々が没落の暗号になると、そんな具合に考えるだけでも素晴らしいことではなかろうか。[…] 書くということとはまた僕の、そして夜の態度でなければならぬ。書くことが不安なのは僕が書かずに居られないからだ。(「名もなき夜のために」)⁴⁴

書きはじめてみると、書きたいこと、書かなければならぬことが山ほどあるのに驚いた。案外これでよかったのかもしれない。[…] とにかく今の気持ちでは、これは至って安全で確かな方法のような気がしてならない。[…] 順序よく書いていこう。[…] 運命や未来のことについて、または僕の嘘や君のごまかしなどについて、僕は書きたい。(「虚構」)⁴⁵

「名もなき夜のために」に描かれている「書くこと」は、その内容に重要性が見られるのではなく、ただ「書くこと」自体から快楽を得ようとしているのである。「虚構」においても、「書くこと」はその内容よりも、書きたい気持ち、書かなければならない強烈な希望のほうに前景化されている。「名もなき夜のために」は 1948 年 5 月から執筆され、同年 7 月から異なる雑誌で刊行された。「虚構」は 1948 年 8 月に脱稿して、同年 11 月に掲載された。両方とも GHQ の事後検閲の時期に出版されている上、共に『夢の逃亡』に収録されているため、「後記」の「書くことによって、私はその霧を切り抜け、しかし書かれた結果については、どうでもよかったのかもしれない。」と呼応している。つまり、GHQ の検閲という「霧」を切り抜くために、安部公房＝語り手はテキストにおいて、書く内容よりも、書く行為＝創作することに政治的抑圧に対抗する希望を託していると言える。安部公房にとって、この時の「書くこと」にはもう一つ現実的な意味合いを帯びる。前文で引用した「中埜肇宛書簡第 11 信」で、安部は次のように語っている。

稿料は前渡し、て呉れるらしいので、僕も借金を山の様に積んでゐる現在、ほつと一息ついた気持ちです。でも、生活の為に書くのは厭だと思ひます。何とか早くこんな生活から脱したいと思つてゐますが、相変らず医者勉強はぴんと来ず、暇さへあればペンと原稿用事(ママ)の事ばかりです⁴⁶。

安部公房は書簡で、生活のために小説を書くことに対して嫌悪を感じていると語っている。しかし、これは書くことに対して嫌悪を覚えるのではなく、生活のために、即ち、原稿料のために小説を書くことへの嫌悪と言ったほうが妥当と思われる。安部自身もこうした生活から抜け出したいと言っているが、書くことの他にできることもなく、つまり、書くことは安部にとって生きていくことと直接つながっている。こうした推論は次の書簡、「中埜肇宛書簡第 12 信」(1948 年 1 月

5日)から垣間見ることができる。第12信において、安部は「生活に追はれるので、小説を書く以外には生きた気持ちもしません。」⁴⁷⁾と述べているが、換言すれば、小説を書かないと生存できないと解釈してもよいのではなかろうか。「名もなき夜のために」と「虚構」において、書くことが繰り返し表象されるのは、GHQの検閲への対抗とは別に、書くこと＝創作することによる原稿料に依存する実生活をも意味していると思われる。

安部公房は書簡という私物においても、GHQの検閲方針を過剰に意識していると論じたが、私見によれば、書簡まで注意を払うのは、作品が出版されることによって原稿料を得ることが、安部にとって、生きていくことに関わっているからだ。左翼政治集會に没頭する安部公房は、書簡がGHQの郵便物検閲を受けたことを察したことによって、小説作品がGHQの検閲処分を受けないように、その後の書簡において決してGHQの検閲方針に抵触する内容を書かなかったのである。前文で引用した検閲に対抗してきた永井荷風でさえも、生活が書くこと＝創作に頼ると、自己検閲が機能するようになるのである。山本武利の考察によると、荷風の変化は以下のようなものである。

荷風は莫大な遺産を父親から相続していたため、戦前には売れ行きや発禁を気にしないで、また金銭的打算の世俗に汚されることはなく、金利、配当や少なからぬ印税で優雅な生活を送ることができた。しかし、終戦後の経済の混乱で、相続資産価値は暴落し、原稿料に依拠した晩年を送らざるをえなくなった。[…]⁴⁸⁾1946年後半以降の荷風の日記は、隠者風の権力批判の仮面の姿勢を捨て、新しい権力を象徴する検閲当局に妥協、さらには無意識での受入れを行うようになった。[…]⁴⁹⁾フラタニゼーションに触れなくなった荷風はプレス・コードに従順に従う検閲の優等生になったことが分かる。1947年10月15日以降、出版は一部を除いて事後検閲となったし、1949年11月1日以降、検閲廃止となったが、書換え無視の占領

初期の姿勢に戻ることはなかった⁴⁸⁾。

永井荷風でさえも、検閲に順応するようになり、荷風より経済的に困難であった安部公房が検閲方針に抵触したくない心情も理解できよう。しかし、安部公房にはGHQの検閲に対して、挑発する一面も見られる。『夢の逃亡』の「後記」が示しているように、安部公房は「書くこと」＝創作することによって、GHQの検閲という政治的抑圧に対抗していることを看過してはならない。従って、安部公房の初期文学作品には二つの特徴が見られる。一つは、GHQの検閲方針に順応することによって、検閲方針に抵触する描写が明確に見られない点である。もう一つの特徴は、GHQの検閲という政治的抑圧に対抗する性質を持つ点である。

安部公房の文学作品に見られるこうした特徴の基底には、フロイトの精神分析があると思われる。周知の通り、フロイトの「自我とエス」によれば、人間の心的装置には三つの審級があり、即ち、自我、エス、超自我がある。エスは欲動の集合体である。自我は理性を代表して、欲動を抑圧する作業を担当している。即ち、外部の状況を察知して、エスの欲動が外部の状況と矛盾しないように機能している。超自我は、自我がエスの欲動を満たそうとする時において、エスの欲動を抑圧するように自我に命令する機能を持つ。換言すれば、超自我は自我に対して、父のような社会的役割を果たしている⁴⁹⁾。フロイトは「〈文化的〉性道徳と現代の神経質症」の中で、人間の欲動と創作活動との関係を以下のように論じている。

ごく一般的に言って、われわれの文化は、諸々の欲動の抑え込みのうえに築かれている。[…]⁵⁰⁾性欲動、より厳密には、諸々の性欲動 […]⁵¹⁾文化の仕事に桁はずれに大きなエネルギー量を供給しているのがこの性欲動であって、それを可能にしているのは、この欲動にとくに際立っている特性、すなわち本質的にその強度を減少させることなく目標を遷移させることができるという特質であ

る。もともとは性的であった目標を、もはや性的ではないけれど心的にはそれに類似した別の目標に振り替えるこの能力は、昇華の能力と呼ばれている。[...]性欲動のどの程度までが昇華可能、利用可能となるかは、まずはそれぞれ生まれもった〔性的〕編成によって決まっている、とわれわれは考えている。その上で、生活経験による影響や心の装置が受けた知的感化を通して、それ以上の性欲動を昇華へと差し向けることも可能だということである。[...]つまり、文化の仕事のために利用可能なエネルギーは、その大部分が、いわゆる倒錯的な部類の性的興奮を抑え込むことによって獲得されるということなのである⁵⁰。

フロイトはこの論文において、心的構造の三つの審級を用いて、人間の欲動と文化活動との関係を論じている。性欲動はもともと性を目標とするが、その目標が「生活経験による影響」や「知的感化」に象徴される超自我に抑圧されることによって、「昇華」の能力を高めることになる。性欲動における「昇華」能力の向上こそが、「文化の仕事に桁やずれに大きなエネルギー量を供給している」につながる。つまり、人間が「文化の仕事」における「エネルギー」を獲得するためには、超自我がもたらす政治的・社会的抑圧と、人間の欲動の満足が葛藤しなければならないのである。

こうしたプロセスにおいて、一部の人間は政治的・社会的に抑圧された欲動を、芸術創造に貢献するが、しかし、多くの人は政治的抑圧によって神経症になるとフロイトは別の論文で述べている⁵¹。フロイトの論考をまとめると、政治的、社会的抑圧と個人の欲動との衝突はエネルギーを生産して、そうしたエネルギーが芸術創作に発散できれば、芸術に貢献できるが、その発散が個人の内面に向けた場合、神経症になるのである。

ここで論じられている人間の欲動は性欲動を指しているが、この性欲動に対立する欲動として、初期のフロイトは自己保存欲動の概念を挙げている。フロイトによると、すべての生命体には自己を保存することだ

けを目的とする根源的な自己保存欲動、いわば生の欲動が存在している。しかし、後期のフロイトは、死の欲動（タナトス）を発見したことによって、性欲動と自己保存欲動を死の欲動と対比すると、性欲動と自己保存欲動は、主体の欲望を満足させる点において共通していることに気づく。従って、フロイトは、性欲動と自己保存欲動（生の欲動）を同一視するようになり、二つの欲動を統一的にエロスの欲動（エロス）と考えるようになった⁵²。従って、自己保存欲動（生の欲動）が政治的・社会的抑圧を受けた際にもエネルギーは生産され、このエネルギーが芸術創作と結びつけることができるはずである。

ここで、筆者は、安部公房の初期作品は、GHQの検閲という政治的抑圧と安部公房個人の自己保存欲動（生の欲動）との衝突によって創作されてきたと考える。この時期の安部は、フロイトの精神分析とシュールレアリスム文芸との関係を熱心に論じたことがあったため、フロイトにおける欲動の抑圧と小説創作との関連性を理解していると思われる。安部公房はGHQの検閲の期間中に「シュールリアリズム批評」という論文を発表した。その一節を以下に引用する。

今では精神作用の構造を《意識—無意識》の図式によって説明するのは一応の常識である。意識と、絶えずその監視検閲を受けている無意識との矛盾、内的軋轢がプシコノイローゼだと考えられる訳である。[...]意識は絶えず無意識界の作用を検閲し、その表出された質が無害であるときにだけ表出を許すが、さもない場合はそれを変質あるいは抑圧しようとする。その選択性は社会的関連に於て捉えられなければならない。[...]抑圧階級の圧制が意識では検閲し切れないほどの刺戟を無意識界に与えた場合、バランスはついに破れる。精神深層作用は露呈あるいは爆発せざるを得ない。[...]シュールリアリストはただ単に深層作用を主張したのではない。意識作用の負担を超えた無意識界への刺戟を主張したのである。[...]一般にプシコノイローゼの内的軋轢が激しくなると、

深層作用は肉体的発作によって脱出を試みるものであるが […]その表出の持つ意味は刺戟に対する本能的ともいえるべき自己保存あるいは種族保存の衝動であり […]そして内的軋轢を耐えながら詐病によって放散させず芸術まで高める（昇華させる）ことによって創造の契機としなければならぬ⁵³。

「シュールリアリズム批評」は1949年8月3日に雑誌『みづゑ』に発表された安部公房の論文である。新潮社の全集によれば、この論文が脱稿されたのは同年の6月15日であるため、この論文がGHQの検閲期間中に発表されたことは言うまでもない。安部は論文の中で、フロイトの精神分析とシュールレアリスム芸術創作との関連性を論じている。彼の説明によれば、「抑圧階級」が過剰な「刺戟」（＝抑圧）を無意識に与えると、精神の「深層作用」（＝無意識）は爆発するのである。シュールレアリスム芸術は被抑圧階級の芸術だが、その芸術は抑圧された無意識の状態に視点を置くのではなく、無意識が抑圧される過程に焦点を当てるのである。そして、意識が「社会的関連」をもとに無意識を抑圧する際、無意識には自己保存という本能が機能して意識の抑圧に対抗するのである。

シュールレアリスム芸術創作に対する安部の理論は、自己保存欲動（生の欲動）が政治的抑圧を受けた際に生産されるエネルギーが芸術創作に貢献するというフロイトの理論と共通している。従って、安部公房の初期文学作品に見られる二つの重要な特徴は、フロイトの心的構造における「エス」、「自我」、「超自我」の理論で説明することができる。GHQの検閲期間中に安部が検閲方針に抵触しないように創作技巧を施していることは既に論じた。その創作過程において、検閲という政治的抑圧に順応を示す安部公房の自己検閲は、正にフロイトの心的構造における「自我」が、「超自我」の道徳性と社会性をもとにしている命令に従うと似通っている。GHQの検閲は、作者の創作に介入して、創作の自由を妨げようとする社会的・政治的抑圧として存在している。こうしたGHQの検閲は、フ

ロイトの心的構造における「超自我」と共通した機能を働いている。つまり、検閲方針に抵触する描写が明確に見られない安部の初期作品の特徴は、GHQの検閲による政治的抑圧が「超自我」として安部公房の「自我」＝理性に強く機能した結果に他ならない。

安部公房の初期文学におけるもう一つの特徴は、GHQの検閲に対抗する性質を持つことである。既に論じたが、この時の文学創作は安部の現実状況と厳密に関わって、原稿料で生活を維持することは、文学創作が安部公房にとって自己保存欲動の表象と言える。原稿料で生活を維持することは他の作家にも言えるが、極度に貧困であった安部の自己保存欲動は特に強かったのは言うまでもない。従って、安部公房の場合、理性を代表する「自我」は、GHQの検閲方針＝「超自我」に命令され、彼の自己保存欲動＝「エス」＝創作することがGHQによる言論統制という外部の状況と矛盾しないように、その欲動を抑圧する。そして、GHQの検閲という政治的抑圧と、極度の貧困の中で生きて行く生の欲動＝創作することが衝突することによって、安部公房の文学創作におけるエネルギーを作り出したのである。つまり、創作すること＝自己保存欲動という被抑圧階級が、GHQの検閲や自己検閲が象徴する抑圧階級と衝突することによって生まれる文学創作のエネルギーを追求するためには、上記の対立構造を常に維持することを余儀なくされたのである。こうした複雑なプロセスを通して、GHQという政治的抑圧は、安部公房の初期文学作品の創作にとって、重要な条件と化したのである。

終わりに

本稿は安部公房の初期作品と戦後GHQによる検閲との関連性を論じた。まず、安部公房におけるGHQへの態度を、中埜肇宛の諸書簡を通して考察した。日本に戻って間もなく、左翼政治集会に参加するようになった安部公房は、自分の名前がGHQの検閲リストに入る可能性を孕んでいることを配慮して、検閲された書簡を境目に、その後の書簡において、言葉遣いに

注意するようになり、検閲方針に抵触するような言葉を極力避けるようになったのである。特に、自己の貧困状況が深刻でありつつも、書簡においては経済状況の緩和を記している。そうした自己検閲は、書簡だけではなく、GHQ の検閲期間中に刊行された処女作『終りし道の標べに』を通して察することができる。『終りし道の標べに』のテキストにおいては、満洲国や戦争といった検閲項目への言及がほとんど見られず、言及した部分においても、加工されていることによって、検閲項目には抵触していない。検閲が廃止された後、1965 年に、『終りし道の標べに』のテキストは改訂されることになり、満洲国や戦争がストレートに表象されるようになった。こうしたテキストの改訂プロセスは、安部公房における GHQ の検閲に対する態度の変換を示していると言える。最後に、安部の初期文学作品と検閲という政治的抑圧との関連性を論じた。安部公房の初期作品には矛盾とした二つの特徴が見られる。一つは、客観的状況と深く関わって、作品に対して自己検閲が常に機能していることである。もう一つの特徴は、安部の文学作品には、GHQ の検閲に対抗

する側面を持つことである。安部公房の場合、GHQ の検閲という政治的抑圧と、貧困の中で生きて行く生の欲動＝創作することが衝突することによって、文学創作におけるエネルギーが生産されるのである。従って、検閲という政治的抑圧は、安部にとって、その文学創作のエネルギーを維持する重要な条件の一つと言っても過言ではない。

本稿は安部公房の初期作品と GHQ の検閲との関係を論じたが、分析対象となる小説テキストが少ないことも看過できない。更に、戦後日本における政治的抑圧は、GHQ の検閲だけではない⁴。従って、検閲が廃止されてから、物語性の強い小説テキストを対象に、安部公房における政治的抑圧と文学創作との関連性を明らかにすることを今後の課題としたい。

[付記] 本稿は 2017 年 3 月 16 日に行われた The 2017 Annual Meeting of the Association for Asian Studies で発表した報告 “The Narrative of the Oppressed and the Experience : A Study of Kōbō Abe’s Early Works” に筆を加えたものである。

注

- 1 古川純解説、古川純、岡本篤尚訳『GHQ 日本占領史 第 17 巻 出版の自由』日本図書センター、1999 年 3 月
- 2 江藤淳『閉ざされた言語空間』文藝春秋、2016 年 2 月
- 3 山本武利『GHQ の検閲・諜報・宣伝工作』岩波書店、2013 年 7 月
- 4 前掲 2、p. 11
- 5 十重田裕一「植民地を描いた小説と日本における二つの検閲—横光利一『上海』をめぐる言論統制と創作の葛藤」『検閲の帝国 文化の統制と再生産』新曜社、2014 年 8 月、p. 105
- 6 前掲 1、p. 24
- 7 十重田裕一「解説 内務省と GHQ/SCAP の検閲と文学——一九二〇—四〇年代日本のメディア規制と表現の葛藤」『検閲・メディア・文学 江戸から戦後まで』新曜社、2012 年 3 月、p. 93
- 8 森村優太「「デンドロカカリヤ」論」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇 第 43 号』2015 年 3 月 1 日、p. 148
- 9 前掲 2、p. 230
- 10 鳥羽耕史は安部公房が参加した政治集会について詳しく考察し、「この運動体のリーダーであった安部公房は、一九五一年以降、芸術の前衛から政治の前衛への傾斜を強めていく。[…]〈人民芸術集団〉の結成をもって〈世紀の会〉の「最終的解散時」とすることができるだろう。しかし〈世紀の会〉が政治と無縁だったわけではない。『世紀群』の最後に刊行された『文芸評論の課題について』は、一九五〇年二月四日の文学新聞『リテラトゥールナヤ・ガゼータ』に掲載されたソ連邦作家同盟本部第一三加回総会における同盟書記長ア・ファージェエフの報告である。桂川寛の回想によれば、どこからともなく持ち込まれた訳稿に

よるものだが、翌年蔵原惟人訳で代表作『破壊』が出版されているのを見ても、既に日本共産党との繋がりができていたための企画のように見える。」と述べている。（『運動体・安部公房』一葉社、2007年5月、p. 21）

- 11 『GHQ 日本占領史 第5巻 公職追放』（増田弘・山本礼子訳、日本図書センター、1996年2月）の「共産主義者の追放」と『GHQ 日本占領史 第11巻 政党の復活とその変遷』（伊藤悟訳、日本図書センター、1996年2月）の「共産党に追放」によれば、1947年当初より、日本共産党は一連の暴力行為の行使によって反占領政策を取り始めた。1949年1月の衆議院選挙で政治的勝利を収めたことで、GHQ は日本共産党が暴力事件を起こして、一般市民を無秩序状態に陥れようと望んでいると考え、これまで追放とは無縁であった日本共産党に対して、合法政党として許容されるべきかどうか、という問題を提起し、その後、共産党員が追放されるようになったのである。
- 12 前掲2、p. 252
- 13 「中埜肇宛書簡第10信」『安部公房全集1』新潮社、1997年7月、p. 269
- 14 前掲13、p. 270
- 15 戦中最後に書いた書簡「中埜肇宛書簡第7信」（1944年7月3日）では、「精神分裂者の詩」という詩が書かれている。
- 16 「中埜肇宛書簡第8信」『安部公房全集1』新潮社、1997年7月、p. 188
- 17 「中埜肇宛書簡第9信」『安部公房全集1』新潮社、1997年7月、p. 267
- 18 前掲13、p. 270
- 19 「中埜肇宛書簡第11信」『安部公房全集1』新潮社、1997年7月、p. 415
- 20 安部公房「後記」『夢の逃亡』徳間書店、1968年4月20日
- 21 山田風太郎『戦中派閥日記』小学館、2003年6月、p. 136
- 22 永井壮吉『新版断腸亭日乗 第六巻』岩波書店、2002年2月、pp. 139-140
- 23 アンヌ・パヤール＝坂井「事象としての検閲と幻想としての読書——谷崎潤一郎をめぐる」『検閲・メディア・文学 江戸から戦後まで』新曜社、2012年3月、pp. 107-108
- 24 検閲方針における30の項目は江藤淳の『閉ざされた言語空間』による。
- 25 十重田裕一「占領期日本の検閲と川端康成の創作——「過去」「生命の樹」「舞姫」を中心に」『川端康成スタディーズ 21世紀に読み継ぐために』笠間書院、2016年12月、p. 195
- 26 前掲25、pp. 197-198
- 27 前掲25、pp. 199-200
- 28 川崎賢子「かいくぐることと自粛と——昭和モダニズム文学者・久生十蘭の検閲対応」『検閲・メディア・文学 江戸から戦後まで』新曜社、2012年3月、pp. 137-138
- 29 山川傳之助「『昭和維新』の基礎方向範囲序論」『信人』第十五巻第二号、1946年2月、p. 16
- 30 勝田貞次「日本インフレの前途」『講演』第三年一月号、1948年1月、p. 22
- 31 『終りし道の標べに』における改訂問題を論じた先行研究として、山田博光「『終りし道の標べに』」（1971）、西田智美「『終りし道の標べに』の改訂について」（1990）、竹田志保「『終りし道の標べに』改稿過程をめぐる」（2002）、坂堅太「『内的亡命者』の誕生——安部公房『終りし道の標べに』の改訂を巡る諸問題」（『二十世紀研究』2009年10号）が挙げられるが、坂堅太の考察は本稿におけるGHQの検閲と関連性を持たないため、詳しく展開しないことにする。
- 32 「あとがき——冬樹社版『終りし道の標べに』」『安部公房全集19』新潮社、1999年4月、p. 476
- 33 山田博光「『終りし道の標べに』」『国文学 解釈と鑑賞』1971年1月、p. 80
- 34 西田智美「『終りし道の標べに』の改訂について」『香椎潟』1990年36号、pp. 39-41
- 35 竹田志保「『終りし道の標べに』改稿過程をめぐる」『藤女子大学国文学雑誌』2002年67号、p. 107
- 36 前掲34、p. 35
- 37 「終りし道の標べに [真善美社版]」『安部公房全集1』新潮社、1997年7月、p. 359
- 38 「終りし道の標べに [冬樹社版]」『安部公房全集19』新潮社、1999年4月、p. 448
- 39 前掲37、p. 280
- 40 「友を持つということが」『安部公房全集2』新潮社、1997年9月、p. 135
- 41 前掲37、p. 383

- 42 前掲 38、p. 467
- 43 旧版の『終りし道の標べに』では、「錦県」という満洲国の地名が書かれている。「鴉沼」(1948 年 8 月)では、戦中の軍隊や、戦後の描写が見られる。
- 44 「名もなき夜のために」『安部公房全集 1』新潮社、1997 年 7 月、p. 491
- 45 「虚構」『安部公房全集 2』新潮社、1997 年 9 月、pp. 84-85
- 46 前掲 19、p. 415
- 47 「中埜肇宛書簡第 12 信」『安部公房全集 1』新潮社、1997 年 7 月、p. 417
- 48 前掲 3、p. 191-193
- 49 道籙泰三訳「自我とエス」『フロイト全集 18』岩波書店、2007 年 8 月
- 50 道籙泰三訳「〈文化的〉性道徳と現代の神経質症」『フロイト全集 9』岩波書店、2007 年 10 月、pp. 258-260
- 51 フロイト著、中山元訳「文化への不満」『幻想の未来／文化への不満』光文社古典新訳文庫、2007 年 9 月
- 52 須藤訓任訳「快原理の彼岸」『フロイト全集 17』岩波書店、2006 年 11 月
- 53 「シュールリアリズム批評」『安部公房全集 2』新潮社、1997 年 9 月、pp. 262-265
- 54 GHQ の検閲は 1949 年 10 月末に廃止されたが、占領軍による支配統治は継続している。